



矢 沢 出 合

滝があり直登。出合から断続していたナメが途切れ、もう沢も終わりに近い。一時二〇分昼食をすませ六段の滝を越えるとまた二俣、左沢の方が本流のようであるが、もうどちらをつめても同じようなものなので、稜線に近いと思われる右沢をとる。ブッシュがかぶさり歩きにくくなる。いつしか水の流れも消える。スキーやタイヤ、カン類などのゴミがあらわれてきたところで沢筋も消えるが、五分もしないうちに天元台ロープウェイ駅から少し下った地点。インターハイコースとダウンヒルコースの分岐点に飛び出した。二時五〇分 (記・

(タイム)

出合八・四〇―二俣二〇・二五―稜線一一・五〇

## 横 川

一九七八年九月十日

◆天気(晴)

横川の入口は狭く、山ブドウのつるがふさいでいる。おまけに水量も少なく、期待を裏切られた。半ばあきらめて廻行開始。

一五分程でコンクリート製の橋を越し、その先一〇分おき位に二つの砂防ダムを越える。

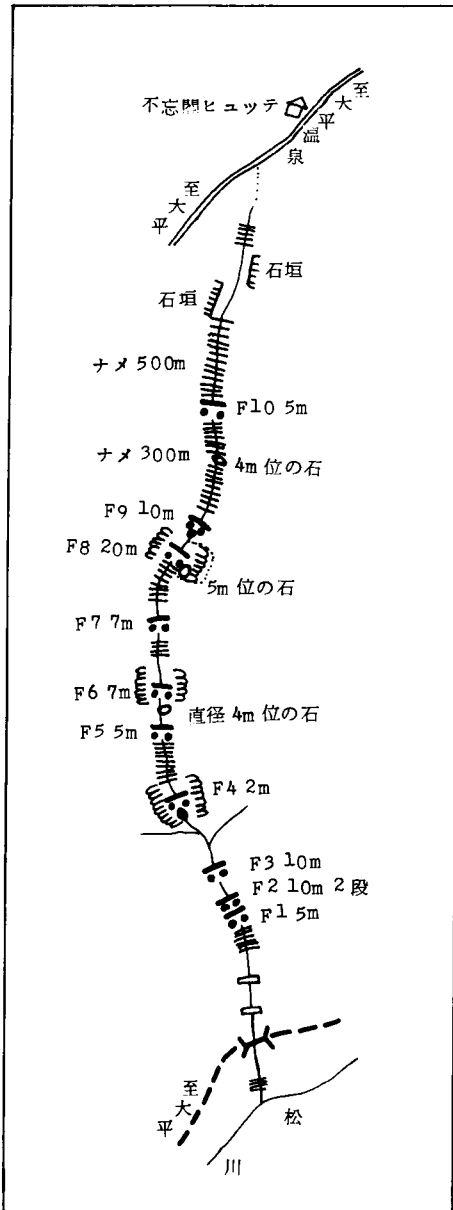
九時一五分、最初の滝（五トビ）に合う。そして五分たらずでF2（二〇トビ滑状二段）。こうなると先が楽しみだ。九時二五分、F3一〇トビに出合う。幾筋もの線状になって流れ落ちている。「雨だれの滝」と名づけてみた。直登は無理で、右岸を捲く。

F4の先五分程はナメが続く。F5を乗り越した所に

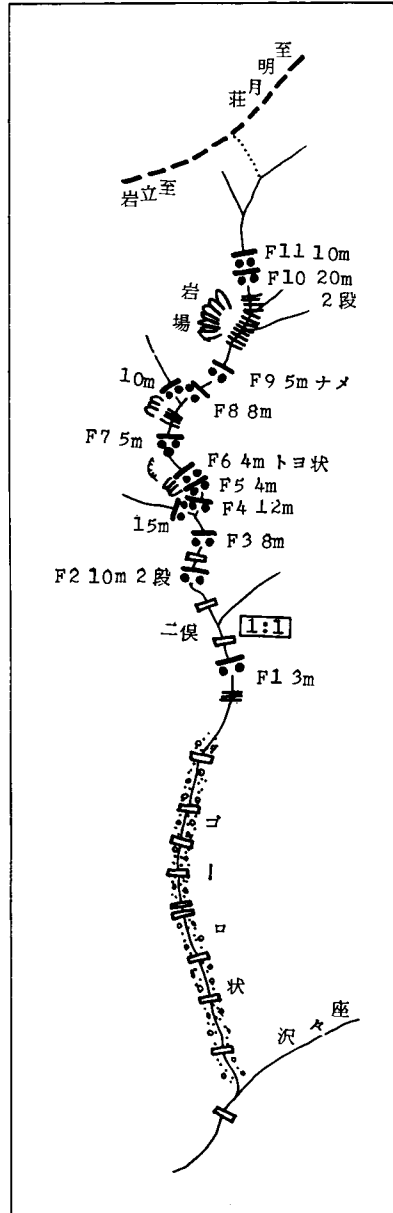
は大石が沢をふさぐようにころがっていた。F6七トビは何なく直登し、F7七トビもホールドにめぐまれ直登。この間滑滝を快適にこえる。

F8二〇トビは直登不可能。左岸を捲いて沢に降りる。すぐF9一〇トビ。ホールドに注意して慎重に登る。

この先は三〇トビ程のナメである。気分爽快。直前に直径四トビ程の石が沢をふさいでいた。F10を越えた先もまたナメ。今度は一五〇トビ位の長さがある。



横 川 (作図: )



長倉沢 (作図: 5)

右岸にきちんと積んだ石垣が現われた。その先今度は左岸にも石垣が見られる。昔の大平温泉に通じる道でもあったのだろうか。

ここまでくるともう源流という感じである。コースを左にとってヤブをこぎ、一時五五分林道に出る。

出合の平凡さからは想像できない意外な滝の連続に充分満足する沢登りであった。 (記・一)

(タイム)

出合八・一五―沢終了一一・四五―林道二一・五五―  
不忘閣ヒュッテ一・二〇五

## 長倉沢

一九七八年七月十八日

### ◆天気(晴)

大平部落の少し先に車を置き、出合まで林道を歩く。八時四〇分ヤブをこいで沢に入る。

今日も快晴で暑くなりそうである。地下たびをはき、わらじをつける。水の冷たさに身がひきしまる。さあこれから未知の沢を開拓するのだ。